

エミットとかあさんの歌



ラッセル・ホーバン 作 谷口由美子 訳 リリアン・ホーバン 絵

谷口由美子(たにぐち ゆみこ)

わたしは、これまでに動物を主人公にしたお話を、いくつか訳したことがあります。

メウシとか、トラとか、ネズミの話です。

でも、わたしは、このカワウソ
おやこの本を手にしたときから、
この物語がだいすきになりました。
はじめは、ちよっぴりさみしい
けれど、だんだん、胸がどきどき
してきて、さいごは、ほかほかと
幸せな気分になれるんですから。
みなさんも、きっと、そうなる
ことでしょう。

基本カード記載例

エミットとかあさんの歌〈文研子どもランド〉

訳者 谷口由美子 発行者 佐藤武雄

N.D.C.933 ホーパル

エミットとかあさんの歌

文研出版 1977 72p 23cm 文研子どもランド

発行所 文研出版 東京都文京区向丘2-3-10 大阪市天王寺区大道4-128

印刷所 西口印刷株式会社 製本所 日本紙興株式会社

© 谷口由美子 1977 BS-770101

・著者との契約により検印廃止

エミットと かあさんの歌

ラッセル・ホーバン 作 谷口由美子 訳



Emmet Otter's Jug-Band Christmas

Text copyright © 1971 by Russell Hoban

Illustrations copyright © 1971 by Lillian Hoban

Japanese translation:

©1977, by Bunken Shuppan (A division of Shinko Shuppansha Keirinkan)

Japanese translation rights arranged with Parents Magazine Press
through Japan UNI Agency, Inc.

エミットとかあさんの歌



クリスマスが やって きます。そうです、クリスマスは、もうすぐ そこまで きて います。

冬の ^{ふゆ} タぐれ、あちこちの ^{いえ} 家の まどには、ぽつと あたたかい あかりが ともって いました。

雪が ^{ゆき} ものおき小屋 ^{こや} に ふきよせて、小山 ^{こやま} のように つもって いました。どの ^{いえ} 家の わきにも、まきが たくさん つんで ありました。

そして、谷 ^{たに} あいの カエル村 ^{むら} も、クリスマスの くるのを まって いました。

カワウソのエミットと かあさんは、川 ^{かわ} つぶちの まずしい 家に ^{いえ} すんで いました。クリスマスは もうじきだ というのに、おやこは とても びんぼうでした。





エミツトのとうさんは、
もう 死^しんでしまい かあ
さんが せんたくやをし
て はたらいて いました。
でも、カエル村^{むら}には 電^{でん}氣^き
が ひいてないので、電^{でん}氣^き
せんたくきは ありません。
だから、かあさんは、せん
たく板^{いた}と たらいで、ごし
ごし せんたくを するの
です。

毎^{まい}日^{にち}、エミツトは、ボー

トを こいで、 “カメのまがりかど” から、 “ミサゴみさき”
までを、 いたりきたりしました。 あちこちの 船ふねつき場ばに
おいて ある おとくいさんの せんたくものを、 かあさんの
ところへ はこび、 あらいあがったものを、 また はこんで
いくのです。

エミツトは、 川かわの 水みづを くみあげたり、 たきぎに する
木きを 切きつて、 たばに して つみかさねたり、 いろいろ 家いえ
の しごとを しました。

それから、 とうさんが のこしてくれた 道具どうぐばこを もつ
て、 となりきんじよを まわり、 たのまれた ちよつとした
しごとを しました。

毎日まいにち、 エミツトは さかなを つりました。

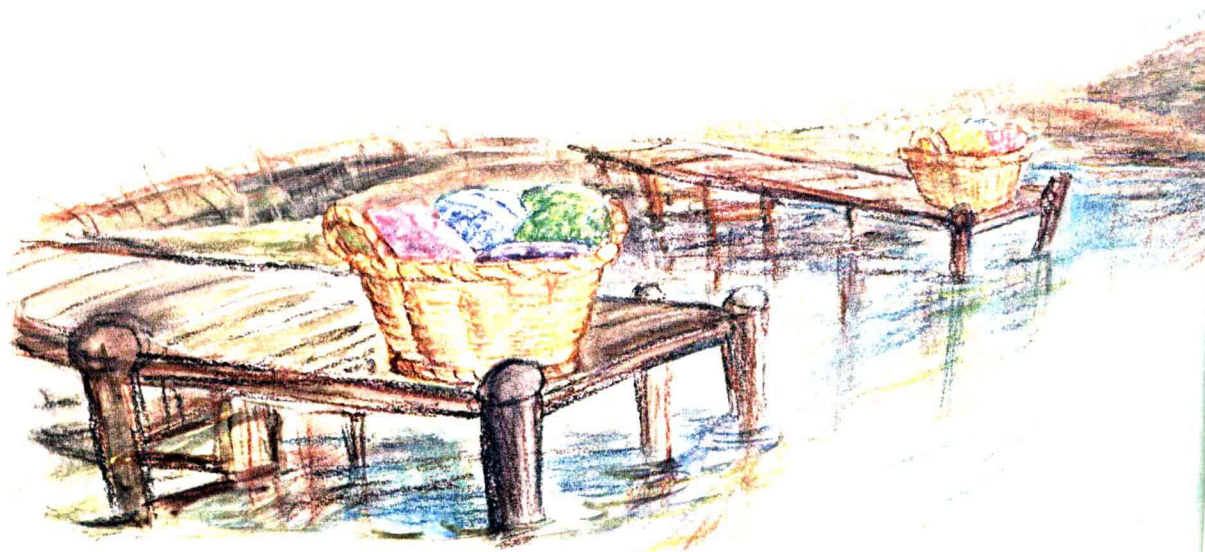
こうして、おや
こは どうやら
食^たべるものには
こまらずに すみ
ました。
おやこは、かせ
いだ お金^{かね}で 家^や
ちんを はらい、
どうにかこうにか、
くらして いたの
です。



けれども、おやこは いつも
びんぼうでした。

そのうえ、ことしは、とくに
くるしかつたのです。小麦こむぎや、
やさいの できが わるく、川かわ
下しもの せいざい所しよ（いたや ざい木を）で
も、しごとが へってしまいま
した。しごとが なくなつて、こ
まつて いるものが たくさん
いました。

いつも、エミツトの かあさ
んに せんたくものを たのん



でいた おかみさんたちも、じぶんでやるようになりま
した。

エミットが、これまで たのまれて やって いた、ちよつ
とした しごとも、せいざい所^{しょ}を くびに なった、ビーバー
のジェイクや、ジャコウネズミのグローバーが やるようにな
りました。

「まあ、どうにか やって いかなくちや。これまでだつて、
そうして きたんだから。」

エミットと かあさんは、おたがいになぐさめあうのでし
た。でも、ふたりとも、こういう くらしが、つくづく いや
になつて きて いました。

「きよ年^{ねん}の クリスマスには、エミットに マフラーを あん



でやったわ。その まえの 年は、ミトンの 手ぶくろだつたつけ。」

と、かあさんは、アライグマのアーマに いました。

「アリス、マフラーだって、ミトンだって、すてきだわ。でも、たいせつなのは プレゼントの なかみじやなくて、その 気もちもちよね。」

と、アーマが いました。

すると、かあさんが いました。

「そんな ことは、よく わかって いるわ。でも、まずしいくらしが こう いつまでも つづくと、一どで いいから、おもいきって エミットが 目を みはるような クリスマス・プレゼントを して やりたいと おもうのよ。なにか、すて

きな、ぜいたくなものをね。」

「でも、ことしは、とてもそういうわけにはいかないわね。」

「まったく、いつもいつも、あくせくしてなくちやならな
いんだわ。」

かあさんは そう 言って、また せんたくに とりかかり
ました。

「うちの かあさんたら、のんびりした ことが ないんだよ。」

エミットは、ビーバーのチャリーに いうのでした。

「とうさんが 生きてたころだって、くつろぐって ことは、
ほとんど なかったなあ。とうさんは、へビの油あぶらを 売うりに、

川^{かわ}を のぼつたり
くだつたりして、
しよつちゆう 家^{いえ}
を るすに して
たもの。ずつと
なんしゆうかんも
帰^{かえ}らないことだつ
て あつたよ。や
つと 帰^{かえ}つて き
ても、たいして
お金^{かね}を もつて
こなかつたしね。



でも、かあさんは、
一ども、ぶつぶつ
もんくを いった
り しなかったよ。
とうさんが ヘビ
の油あぶらに うんを
まかせてるんなら、
かあさんは どう
さんに うんをま
かせるんだって
いってたつけ。
あーあ、どうに

